

# 核廃絶への 願い

空が白み始めたばかりの午前5時半。既に広島市の平和記念公園は、原爆慰霊碑に向かう人々であふれていた。

「あの日」から、ちょうど70年後の8月6日。無心で祈り続ける高齢男性、遺影を手に頭を下げる女性らに交じり、米国人のエミリー・ハリスさん(29)が白い花を碑に手向けた。「自分が何も知らなかったことがよく分かった」。日本に留学経験のある友人に誘われ、前日に初めて公園内の広島平和記念資料館を見学したという。

「ここ数年、原爆被害について学ぶ外国人観光客が増えた。日本人より熱心なほど」。原爆ドーム前でガイド活動を行う村上正晃さん(22)が目をつめた。

2014年に同市を訪れた外国人観光客は過去最多の65万人に上り、10年前の3倍以上。資料館に足を運んだ外国人もこれまでで最も

## 被爆70年のヒロシマ体験記 上



外国人の姿が目立った6日の平和記念式典。原爆被害について学ぶ外国人は増えている

### 「人類の敵」 世界に発信

**ズーム** ヒロシマ講座 核兵器の廃絶と世界恒久平和の実現に向けた世論の盛り上げを図るため、ジャーナリストに被爆の実態や放射能の影響、市民らの平和への取り組みなどを総合的に体系的に学んでもらう取り組み。14回目の今回は、広島市の広島国際会議場を拠点に開催し、関東、中部、沖縄などの地方紙、ブロッック紙10社10人が参加した。

世界最大の口コミ系旅行サイトでは、外国人評価の高い日本の観光地として12、13年と2年連続で、資料館が1位だった。「必ず行くべき」「考えさせられる」との意見が並ぶ。

「ヒロシマの訴えの特徴は、核兵器や戦争への市民目線の純粹な憤り」。広島市から委嘱された「ひろしま平和大使」の1人で、同市入りしていたアルゼンチン在住の相川知子さん(47)が教えてくれた。「特定の国への恨みつらみで

「被爆体験を強調するのは日本の戦争の正当化が狙い」との誤解が周辺国で根強い」と指摘するのは、広島市立大広島平和研究所の水本和実教授だ。

そんな実情は数字からもうかがえる。国内の外国人観光客は8割が中国、韓国人などアジア系だが、広島市ではその比率が3割まで下がる。水本教授は「全ての国に核兵器の非人道性を訴えるには、日本軍の非人道的行為や軍都・広島」の歴史など負の側面にも真摯に向き合う必要がある」と説く。

ボランティアガイドの橘光生さん(74)は、アジアの人たちの誤解もヒロシマを訪れてもらえば解けると感じている。ガイドの際、2万人以上とも言われる韓国人の原爆犠牲者を悼む公園内の慰霊塔の説明にも力を入れている。

「市民を無差別に大量殺りくする核兵器の前では国境や国籍は無意味。ナシヨナリズムを超えた人類共通の敵なんです」

ないからこそ、外国人も共感しやすい」

7日までの11日間、記者を対象とした広島市の研修事業「ヒロシマ講座」に参加し、多くの人の話を通じて原爆被害の実態や核廃絶への願いを学んだ。被爆70年を迎え、被爆都市として発信を続けるヒロシマの現状と課題を報告する。(大橋洋平)

多い約23万人を記録し、入館者全体(約130万人)のほぼ5分の1を占めた。実際、黒焦げの弁当箱や三輪車などの遺品の前で、静かに会話する欧米人親子の姿をよく見かけた。

一方で、アジアを中心にヒロシマに複雑な思いを抱く外国人もいる。